

# 附属病院分校で 学習して…

～本人及び保護者手記より～



< Eさんの作品 >



< Lさんの作品 >



< Hさんの作品 >

高知県立高知江の口特別支援学校  
高知大学医学部附属病院分校

〒783-0043 高知県南国市岡豊町小蓮

TEL (088) 866-8624 FAX (088) 866-8625

ホームページ : <http://www.kochinet.ed.jp/idai-s> メール : idai-s@kochinet.ed.jp

## 入院しながら学習する子どもたちのために

突然の病気で入院し、治療を受けなければならなくなった子どもたちや保護者の皆様のご心配は、大変大きく戸惑うこともあるかと思われま  
す。入院生活には様々な制約があり、お子さん本人だけでなく保護者や  
ご家族の皆様も心配や不安を感じておられることでしょう。

私たちの学校は、高知大学医学部附属病院に入院をした子どもたち  
が、治療を受けながら学習ができるように、病院内に設立された特別支  
援学校です。保護者、医療者、前籍校と連携し、入院中から復学後まで  
学習支援を行っています。

この冊子は、これまで本分校で学習してきた子どもたちや保護者の皆  
様に学習や入院中の思いを書いていたいただいたものです。

これから入院生活を送ることになる子どもたちや保護者の皆様に少  
しでも力になればと思い、この冊子を作成しています。手に取って読ん  
でいただければ幸いです。

高知江の口特別支援学校高知大学医学部附属病院分校 教頭

平成18年	11月21日	初版発行
平成22年	3月23日	第三版発行
平成27年	7月17日	第六版発行
平成30年	3月23日	第七版発行
令和3年	2月10日	第八版発行

Aさんより

わたしは、九月二十八日から高知大学の病院に入院することになりました。どうしてかというと、はいの小さいせんが細くなって体のさんそも少なくなつて、ぜんそくがひどくなつたからです。

はじめは、一か月ぐらいの入院のよていだったけど、一月五日までの入院になりました。だから、二学期は、病院の中にある分校で勉強しました。

病院は広くて、子どもからおじいさんやおばあさんまでの人が、たくさん入院していました。わたしがいた二階だけは、子どもが多いので、プレイルームがありました。

プレイルームで、わたしは、みか先生とお紙をして遊んだり、かんごしさんになりたい学生さんとも人形で遊びました。同じ三年生の〇ちゃんと

△君とも遊びました。

分校は、七階にありました。朝、九時にあいさつをして、九時十五分から勉強が始まりました。お昼は、二階のだんわ室に行つて食べました。午後からの勉強は、一時半から始まりました。

一部屋で二年生・三年生・四年生が勉強しました。一番楽しかった教科は、図工です。福笑いを作つて、みんなで作つたのがおもしろかったです。

病院のご飯は、おいしかったです。でも、時々、のこすことがあります。カレーライスが、一番おいしかったです。三時ごろには、おやつも出ました。

病院の人たちは、みんなやさしくしてくれました。お医者さんとよくそくしたことは、毎日の薬ときゅう

にゆうをすることです。これから、健康な体にするために、お医者さんとのやくそくは、ぜつたいまもつていきます。

Bさんより



ぼくは、岡山から転院してきました。高知大学医学部附属病院の分校で勉強をすることになりました。今のところ一人と聞いて緊張しました。でも、後から他の人が四人ぐらい来たので安心しました。中学生の一つ上のC君と一緒に学校に来るようになりました。学習は、一人だけでしたが、楽しかったです。全部の教科を頑張りました。休み時間はけん玉をしました。「もしかめ」ができるようになりました。

ぼくは、もうすぐ退院します。うれしいです。これから、もとの学

校に行ってもがんばりたいと思います。



Cさんより

僕は検査で入院しました。入院中は、いろいろな検査をしました。採血は、最初怖かった。だけど、回数を重ねるうちに慣れてきました。エレントールは美味しくなくて飲みにくかったです。でも、頑張った。

入院中に学校に行くことになりました。最初は、とても驚きました。中3は一人でした。でも、中2のB君がいました。それから、病室から一緒に学校に行くようになりました。休み時間は、二人でけん玉をしました。授業は一人だったけど、頑張りました。僕の目標は、〇〇高校に行くことです。そのためには、勉強を頑張ります。毎日、計画を立てて頑張ります。

Dさんより

「入院して思ったこと」

私は、この学校に来てよかったと思います。理由は、勉強の面で一対一だから私語すらできないので、今までとは違った授業が受けられて、テストの点も上がっていたし、私的にも退院してがんばらないかなという自覚が持ててよかったです。それに体育では、ドローンを初めて操作して、すごく楽しかったし、自立活動とかでウィーを山口先生と宮之原先生とした時とかは、先生と一緒にゲームをしているという不思議な気持ちでした。でも、全部すごく楽しかったです。入院生活では、動かない分、体重が3kgも増えてしまってますごく悲しいです：ww 休みの日には、友達も毎週毎週来てくれて、正直、入院生活を楽しんでいました。

私が入院していた時は、運が良いの

か悪いのか、イベントがたくさんあって、いろいろな経験ができました。それに看護師さんの裏話とか医者の方外な一面など、入院していないと分からないことも知れて得した気分です。本当に今まで長いようで短い間、ありがとうございました。

Eさんより

「入院中の思い出」



ぼくが約二か月間入院してしんどかったことは、採血が一週間に2回くらいあることと、朝起きるのがつらいことです。

7階での学習が始まって楽しかったことは、算数で三学期の「並べ方」の勉強ができて楽しかったです。あと、ヒジリのパン屋さんが来て作ってくれたベーグルがおいしかったです。そ

の時に初めてヒジリのパン屋さんは、朝早く起きて仕事をすることを知りました。

十月の初めの休み時間は眠たかったので、いつも寝ていました。その後は、寺田先生、教頭先生などの全員の先生とけん玉をしました。ぼくは、「もしかめ」の記録を135回も伸ばしました。あとは、ブロックスにもはまって、寺田先生などの先生や、お母さんとも病室でブロックスをしました。クリスマスには、ブロックストライアングルをもらえます。

入院して大変なこともあったけど、お母さんとも遊べたし、学校でも遊んだり勉強したりして楽しかったです。



Eさん作

### Eさんの母より

息子が入院したのは、六年生の二期で、運動会が終わってからの計画的な入院でした。その為、事前に息子に入院が二か月と長いので、医大の中の学校に転校することにしたよと伝えたと、あつさり「いいよ」という返事で、頑なに拒否すると思っていた親の方は、拍子抜けしてしまいました。

しっかり心構えをして入院を迎えたつもりでしたが、初めての治療で、親の方に不安が出てしまい、七階の分校に行つては、先生方に話を聞いてもらって、励まされて、元気になって病室に戻る、という毎日でした。

最初はベッドサイド学習でした。その間は、病室から外に出られない日々が続いていてストレスが溜まっていたのですが、先生と勉強したり、ボードゲームをしたり、話をしているうち

に息子の気持ち落ち着いてきているのを感じました。そして、七階の分校に通えるようになった頃から「元の学校に戻る時に寂しくなるね。」と言うくらい分校での勉強や先生との交流が入院生活を送る上で無くてはならない存在になっていきました。普段の勉強の他に先生方とけん玉の技を競い合ったり、卓球をしたり、ALTの先生が来てくれたり、パン屋さんの出前授業を受けたりして楽しく過ごすことができました。

ただ、肝心の数値が安定せず、予定の二か月を過ぎてしまい、その頃に「早く退院したい」とぼつりと先生に漏らしたと聞きました。それまで、親の前では言ったことが無かったので、ハツとしました。数値に振り回され、医大と自宅を往復し、慌ただしい毎日を送っていたので、息子の言葉に耳を

傾ける気持ちの余裕が無くなっていくことに気付かされました。先生方が息子の気持ちに寄り添い、親身になって話を聞いてくれたのでしよう。分校と先生方が居なかつたら、長い入院生活を親子だけで乗り切ることにはできなかったと思います。

結局、入院生活は四か月近くになり、一月に退院しました。入院中、小学部はほぼ一人で、マンツーマン授業でしたので、スムーズに勉強は進み、算数は、元の学校より進んだ状態で戻ることができました。又、入院中の暇つぶしで始めたけん玉は、今も続けています。外来の時に先生方とお会いし、新しい技を披露できるのを楽しみにしているようです。長い間、大変お世話になりました。ありがとうございました。



Fさんより

「入院して思ったこと」

私は、入院して思ったことが二つありました。

一つ目は、意外と入院しても暇ではないということです。理由は、前、別の病院に入院した時はあまり忙しくなかつたし、何もない時はずっと休んでいたことも多かつたけれど、今回入院して、午前も午後も勉強があつたし、間に眼科などに行ったりすると忙しかつたし、終わればリハビリなどに行つたりして、だいたい6回ぐらいは、1階と2階と7階を行ったり来たりしていました。なので、すごい大変というわけではないけれど、あつという間に一日が過ぎていったり、(もうこんな時間なんだ、早いなあ)と思いがら過ぎることが、少なからずありました。だから、暇ではないし、むしろ

忙しいと思えました。

二つ目は、入院はつまらないだけじゃなくて楽しいこともあるということです。理由は、学校に行つたら、勉強だけでなくゲームをしたり、体を動かすことなど楽しいことがあつたからです。とても楽しかつたし、それが明日できるからがんばろうとか、今日楽しいことがあるからがんばろう、という気持ちになり、苦手なこともがんばれたと思います。

Gさんより

僕は、12月11日頃からこの病院に入院しています。辛い闘病生活の中で、特に計5回の手術や、計3回の化学療法、そして、ほぼ毎日あつた学校は、僕の中で厳しいものでした。

手術は、まず入院当日に頭に管を通し、身動きが取れないという状況に、



涙を流したりしました。そして、いちばん辛かったのは、約15時間の手術です。顔も腫れて、もう以前の僕ではなくなりました。

手術後のICUでは、右には点滴棒、左には血圧計、足元にはマッサージ機。もうICUは大嫌いです。でも、ICUがあつたからこそ、体の調子を整え、体を休ませることができたのだと思います。

僕は、年内には退院できると思っていました。今日は5月8日。とんでもないですね。よく頑張った自分。

化学療法は、まず点滴の針を刺すから、とても痛いし、僕の血管は点滴に向いていないので、大変でした。しかもこれを3回したんです。よく頑張った自分。

学校は、学校らしくない分校の教室で軽く勉強を習いました。たくさんの

先生の中で、特にお世話になったのは宮之原先生です。数学の先生で、宿題も多く苦手な先生だと思っていたけれど、自立の時、ゲームを一緒にしてくださったりしました。

僕は、こんな病気にかかってしまったけど、完全に治りました。もう、こんな病気には一生かかりません。

Gさんの母より



息子が入院したのは、中二の十二月のことでした。前日まで部活で走り回っていて、その前の日は、たくさんご飯を食べていたのに、体調は一転し、我が子の事ではないんじゃないかと、しばらくは信じられませんでした。翌年三月まで治療計画が立ち、未知の世界という何が何だかわからなくなり

ました。

治療は思うようにうまくいかず、不安な事ばかり起きて、身体中の水分が無くなってしまうほど泣きました。勉強とかどうでもよく、余裕もなくて、ただただ、この子をどこへも連れて行かないで、と願うばかりでした。

分校へは、転校と言う言葉を聞き、拒否反応が、私の中では起きていました。が、丁寧な説明をしてくださり、欠席が続いての高校受験を考えて不安だったのですが、まだまだ取り返しもつくし、前向きに現実を受け止めて、今、できる事をやっていけばいいと思わせていただき、分校での勉強を決めました。本人は、勉強自体嫌で、それは病気になる前からでしたので、でも、少しでも思い始めてからは、やる気を出して取り組んでいたように思います。個別塾のように、先生が向き合

って教えてくださるので、時にワガママを言ったりしていたのではないでしょうか。

現在、退院して一か月過ぎました。

約一五〇日間の入院をし、元の学校に戻り通学しています。保健室の先生には、「お顔をみかけませんよ」と言っていたいただき、ほっとし、ペンを取りました。入院中の事、思い出さなくなると書くのが遅くなりました事、お許し下さい。

学校へ戻ると、分校の授業の方が進んでいた教科もあり、「受験生だからね」と熱心に関わっていただいた先生方の事を思い出したことでした。

長い入院生活で、たった一度しか涙を見せなかった息子でした。今、思うと一番強かったのは彼だったと思います。もう、完全に治りました。もうこんな病気には一生かかりません。長

いようで短い間、本当にありがとうございます。感謝しています。

Hさんより



「入院して思ったこと」

私は、三月のはじめごろに、入院しました。入院して治療が始まると、体がしんどかったり、気持ちが悪かったり、吐いたりしました。髪の毛も一気にボサツと抜けてびっくりしました。好きな物も食べれないし、薬もたくさんあってしんどかったです。けど、治療をして治っていくと、食べ物の制限もなくなり、つらかった治りようも終わりました。大変だったけど、あきらめずに頑張つてよかったです。

だから、これから入院してくる人にも、あきらめずに頑張つてほしいです。頑張ればきつといいことが待っている

と思います。



Hさん作

Iさんの母より

入院時に大変お世話になりました。先日、あおぞら病院の松本先生からIが入院時につくった「〇×クイズ」のノートを頂きました。ありがとうございました。

少し前の事ですが、入院時のことを思い出しました。5月末に体験入学から始まり、6月14日までの間、Iや私達家族にとって、とっても有意義な時間を過ごすことができました。退院後も毎日、地元の小学校に通い、友達や先生ともとても楽しく過ごことができました。ありがとうございます。



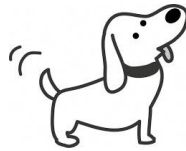
9月初めに体調を崩し、その後この一週間を乗り越えられたら「すごく頑張ったね。」と言ってあげたいくらい危機にあることを伝えられました。が、それからの一か月、今も自分の力だけで生きています。

病院での生活は、思い返せば、本人の前では言えませんが、辛いことばかりだったですが、附属病院分校でのIは、先生方のおかげで楽しく笑顔のIを見ることができました。とても楽しかったと思います。病院では、いろいろなことを学びましたが、日々、Iの頑張りを見てみると、パワーをもらい、日々生きていく意味を教えてくださいます。

転入しないままのIを心良く迎え入れて頂いたこと、本当に感謝しています。頂いた「〇×クイズ」ノートのIの写真もすごく笑顔で、楽しそうな

素敵なお写真をありがとうございます。

これからの日々、頑張つて生きていくIの頑張りに負けず、私たちも頑張ります。先生方も頑張つてください。頂いたノートのおかげで、笑顔がまた一つ増えました。本当に、本当にありがとうございます。



Jさんより

「入院生活を振り返って」

僕は、入院して分校に行くことになって、最初はこの病気になって寝ている時間が多かったのです。授業を受けるのが嫌でした。最初のほうは、授業は病室で二時間だったけれど、それでもものすごく疲れました。でも、毎日授業を受けるうちに段々慣れていって、授業を増やすことができて、7階で授

業を受けられるようになって良かったです。

僕は、中3で受験生なので、授業の教科は5教科しか受けてないけれど、どの教科の先生も、僕が元の学校に戻っても困らないように授業をしてくれました。それに、どの教科の授業もわかりやすく理解しやすかったです。そのおかげで、ここで受けた中間テストでは、とても良い点数を取れて、とても嬉しかったです。苦手だった数学が前よりわかるようになって良かったです。

僕は、自立の時間にウノとかをしたのが楽しかったです。志望校に合格できるように、これからも勉強を頑張りたいと思います。

分校の先生方、本当にありがとうございます。



Kさんより

「入院して思ったこと」

今、ぼくは、高知大学医学部附属病院に入院している。秋ごろからせきが出て、近所の病院へ行った。その後、お腹が歩けないほど痛くなった。夜になつたら、熱が38度出た。そして熱が下がらなかつたので、国立高知病院へ入院した。その時、ぼくは入院するのはいやだなあと思った。

病院では、お母さんがずつとそばにいてくれた。内視鏡検査では、下剤をたくさん飲んでしんどかった。塩水みたいな味を1ℓ飲むのがまずくて飲めなかつたが、2つめ目のうすいアクエリアスみたいなのを2ℓ飲んだ。トイレにも何回も行ってしんどかった。そして、小腸も検査するために今の病院に入院した。また入院することになって、しかたがないなあと思った。

高知大学の病院ではいろいろ検査をして、病気の名前がはっきり分かった。エレンタールという栄養剤を飲むことになって、はじめはまずいと思った。でも、マンゴーやヨーグルト、パインの味は、おいしいと思った。採血の時、血管が見つからなくて6回くらい針をさしなおした。少し痛かったけれど、だいじょうぶだった。

そしてかんごしさんから、この病院に学校があつて治療しながら勉強ができることを聞いた。その時、ぼくは、(えくまじか)と思った。勉強が始まつて、3人いたけど1人ですることになって、はじめはちよつと気まずいなあとと思った。でも、だんだん慣れてきた。勉強は、クラスで1人だったので、質問に全部答えなければならぬので大変だった。

主治医やかんごしさんは、やさしか

つた。お母さんは、ぼくの入院中、仕事を休んでずつと病室にいてくれた。大変だったと思う。もうすぐ退院できるので、今はうれしい。こんなに長く入院するとは思っていなかった。この入院したことはわすれないと思う。



Kさんの母より

息子が入院することになったのは、小学6年生の2学期半ばのことでした。もうすぐ中学生、身体も大きくなってきて、小さい頃から好き嫌いもなく、元氣そのものの子でした。体調を崩してからは、まともに食事もとれず、体重も減っていく一方で…。この状態がいつまで続くんだろう。何とかしてあげたいという思いでいっぱいでした。そんな中、病名がはっきりし、治

療が始まってからは、少しずつ体調も良くなってきました。そして、そうやってくると気になるのは、学校のこと

や勉強のこと。2学期は、ほとんど授業を受けれていないため、親としては、すごく心配していました。本人は

「何とかなるでしょう」と呑気なことを言っていました。病院内の学校に入学してからは、すぐに遅れを取り戻してくれました。また、勉強以外に自立活動の時間があり、私も仲間に入れてもらい、ゲームもしました。(ついつい、私の方が楽しみ過ぎてたかもそれも楽しい思い出ということ。)

学校の先生方は、遠慮がちな性格の息子に「自分の体が一番やきね。がまんせられんで。」と、いつも気にかけてくださいました。優しくて気さくな先生方のおかげで、私も何の心配もなく、安心して学校に通わせることができ

ました。本当に感謝しています。ありがとうございました。

そして、もうすぐ退院の予定です。3か月近くの入院生活でしたが、こんなにも子供と一緒に過ごしたのは何年ぶり？というほどです。一緒にトランプやクロスワード、筋トレもしたり。私にとって楽しい大切な時間でした。また、家に戻っても「お母さんと遊んでね」と言いたいです。

病気とは、この先も付き合っていくことになるけど、自分の体も心も大切に大きく育ってくれることを願っています。



Lさんより

「入院中のできごと」

ぼくは、もうすぐゴールデンウィー

クという時、4月30日に入院しました。内視鏡検査で原因が分かったからです。そして、それから一か月ほどしてから、分校に通い始めました。

最初はおためしで、午前中二時間で、国語と算数だけでしたが、入院期間が延びたので転校になり、それからは午後の授業が増え、教科も社会や理科などの小学校でやるものと、自立活動というやったことのないものが増えました。自立活動は、先生とゲームをする時間でした。かなり楽しかったです。病院のくらしのうち、結局四分の一ほどが分校となったので、意外に暇じゃないなと思いました。

ぼくは、多分そろそろ退院になるので、うれしいです。これから通院になるけど、入院と

いうことにならないように、薬



Lさん作

や食生活に気を付けていきたいです。

Ｌさんの母より

小学六年生の一学期。「念のため」の検査から一転、思いがけず入院生活が始まりました。入院から一か月ほど経ったころ、分校のお話をいただきました。分校については、仕事の関係で知識があり、条件がそろえばぜひお願いしたいと考えておりました。一方、本人は「転校」に不安をもち、戸惑った様子でしたが、体験をお願いすることにしました。

体験は、一日一時間の授業で、国語と算数の二教科でした。初日から宿題が出てびっくりしましたが、本人は久しぶりの学習にワイワイ言いながら取り組んでいました。漢字のプリントはクイズ的なもので、「これ何やと思う？」「これでえいろうか」と親子で

見ることができました。教科書での学習以外にタブレットで練習したことや、Wiで楽しんだことをよく話してくれました。

体験が終わりを迎えるころ、入院が延びて本格的に「転校」を受け入れていただきました。午前、午後と授業が増え、プリントも多く持ち帰るようになりました。本人のペースで学習を行ってくださったようで、学習が進み、たいへんありがたかったです。学習以外にも卓球や人生ゲームなども楽しむことができたようです。特に、「桃太郎電鉄」を体験し、楽しかったようで、しばらく話が止まりませんでした。凶工で、胸像を制作したときも、工夫したことや作品の様子などを何回も話してくれました。

退院し、地元校に戻ってからも分校の話が出てきます。学習面はもちろん、

様々なことを経験させていただいたことに感謝しています。入院、行動の制限、面会の制限の中で、新しい刺激や温かい言葉をいただいたことが気持ちにも大きく影響しました。退院後の生活についてのケース会にもご参加いただき、ありがたかったです。「あなたの応援団が来てくださった」と子どもに密かにつぶやきました。親としてもたいへんお世話になり、ありがとうございました。

Mさんより

「入院生活を振り返って」

自分は、昨年の10月ぐらいに入院して、一年経ちました。

初めての入院生活だったので、最初はもっと手術とかを思うと思っていたけど、自分の病気はそんなに手術みたいなのはしない方がいいようなも



のだったので、安心しました。

入院して最初のうちは何もなくて暇でしたが、入院して一か月ぐらいた時に、父親がタブレットを買ってくれたので、すぐに暇ではなくなりました。

そして、入院して二か月か三か月した頃に、病院の中にある学校に入りました。学校に入るのは嫌でしたが、何か月も学校に行くうちに別によくくなりました。学校では、自分は、どれも同じくらい良くやったと思います。

入院してつらい時も何度かあった気がしますが、どれもすぐ終わったので、そんなに長く続くようなことが無くて良かったと思います。

入院生活でつらいこともあったけど、無事に入院が終えられそう良かったと思います。



Mさんの母より

一年前の夏の終わり、息子の入院生活は、突然、始まりました。

病名を告知された後、今は治る時代だから、と前向きになった瞬間、勉強のことが頭をよぎり、すぐに分校でお世話になることにしました。六年生だった息子は、入院前に殆どの行事を終え、残った大きな行事は卒業式でした。

分校の先生と地元の小学校の先生の努力のおかげで、コロナの中、小学校の仲間と一緒に息子らしい卒業式が出来ました。そこには、将来の夢を堂々と発表している誇らしい息子の姿がありました。病気になったことは、辛く悲しいことでしたが、病院でのいろんな方との出会いは、息子にとって将来の財産になったと思います。ときどき、夜遅くまで塾に通っていたあの頃を思い出し、病気にならな

かったらと考えるときもあります。運が悪かったと病気を受け入れ、治療しながら前向きに勉強してくれた息子を尊敬しています。この一年で、小学生から中学生になった息子ですが、いつも温かく見守っていただき、本当ありがとうございました。

Nさんより

「不思議な入院生活」

始まりは10月15日。あの時はすごく痛くて苦しんでいて、先生の話を初めて聞いて、入院になると聞いたときは、絶望を感じていました。入院してからは、いつ帰れるかとか、いつご飯が食べれるんだろうかとか、いろいろ考えていました。最初らへんは、しんどい検査さもあって、メンタル的にも



すぐきつかったです。だけど、家族や友達の支えで、検査は何とか乗り切りました。

検査が終わって少し日が経つと、点滴ものいて、ご飯が始まった。ご飯が始まったとき、すごく嬉しかったのも覚えていきます。そこから薬も増えて、だんだん退院が近づいていると感じました。リハビリも始まって、すごく楽しかったです。学校も最初に比べると、かなり行くようになった気がします。先生とも気軽に話せて、すごくやりとりしやすかったです。

今思うことは、最初は入院するのが嫌でしたけど、入院していろいろなきことができようになった。二か月間、すごく自分でも頑張ったと思います。あと、中学校の友達のおかげもあって、ここまでこれたと思ったので、会ったら感謝したいです。なんか不思議な入院生活でした。

議な入院生活でした。

Pさんより



九月二十八日に入院して、最初は二週間の入院と思っていたのに、入院が長引き「勉強は追いつくだろうか…」という不安と「ひまだな。」と感じるようになりました。でも、学校に行くようになって、ひまな時間も減り、勉強も追いつけ、うれしい気持ちです。その外にも、自立活動の授業の時に、好きなことをさせてもらい、やさしさを感じました。

先生が分かりやすく教えてくれるので、苦手なところも、ちよつとずつできるようになりました。

学校のおかげで、ひまな入院生活も楽しくなり、一日が早く感じるようになりました。退院して勉強に追いつく

かという心配もなくなりました。学校の先生は、私の病気のこととも考え、ベッドサイドでやってくれた時もありました。

学校の先生たち、やさしく接してくれてありがとうございました。この二か月半、ひまをしませんでした。

Pさんの母より



たった二週間のつもりでの入院でした。それが、まさかの病気発覚、そして三か月の入院生活を余儀なくされ、心が追いつきませんでした。それと同じに、小学生の娘が三か月も学校に行けなくなると勉強も遅れるという不安も押し寄せてきました。不安と心配な気持ちの中、病院内の学校の話聞き、娘と二人で安心したのを覚えていきます。

好奇心旺盛な娘は、早く勉強したい、学校に行きたい、と嬉しそうにしていました。暇な入院生活、退屈だろうと普段、制限をかけていたゲームやDVDなどを、無制限でさせていましたが、学校のおかげで、それをするとも少なくなりました。何よりも、娘が学校に行っている間は、私の時間にゆとりができ、休むこともでき、心身ともに余裕もできました。

授業が終わっても、まだやりたいと言えば、時間が許す限り付き合ってくれたこと、娘の可能性をみつけ褒めてくれたこと、病気と向きあってくれ、病室で授業をしてくれたこと、一対一の指導だったからこそその良さや温かさを実感することができました。学校には、感謝の言葉しかありません。本当に、娘も私も救われました。おかげで、退院後の元の学校生活や勉

強の遅れなど、不安はありません。ありがとうございます。



Qさんより

ぼくは、この病院に来てから不安な思いでいっぱいでした。

なぜなら、いつもの学校生活が急に変わり、一対一でやらなければならぬし、友達の助けもなしで、授業をするのが不安でした。初めてマンツーマンで授業をしたときは、本当に勉強しづらかったです。いろんな緊張の心などいっぱいでした。

でも、そんな中、二日以上通っていると、先生たちと上手に会話ができるようになったし、毎日、先生たちが、ぼくの体の心配をしてくれて、毎度毎度と元気をもらいました。

やっぱり人とのコミュニケーションは大事だし、不安な状態で学校に行

くよりも、自信をもって学校に行き、一人で向き合うのも大事だと思いました。

ここに来て、いろんな検査などつらいことがいっぱいあったけど、いろんな人の支えがあり、やっと退院できました。

ぼくは、今、学校の先生やお医者さん看護師さんに深く感謝しています。本当にありがとうございます。

Rさんより



今回が初めての入院でした。入院ってこんなに大変という経験や、この学校での出来事は、僕にとつて、必ず成長への糧になったと信じている。ここに来たのは11月あたり。前まで入院していた国立病院が紹介という形で、

ここに入院した。最初、入院したときは、戸惑っていた。そもそも病院つてのもあるし、国立ともまた違った感じだったからだ。そんな戸惑う自分をも支えてくれたのは、この分校の先生や友達、看護師さんである。いつも励ましてくれたり、たくさん話してくれた。それが僕には嬉しかったのだ。苦しいことに同情してくれたり、そもそも一緒に喋ってくれた人たちに僕は感謝する。

次に、この分校のことだ。この分校の先生方のおかげで、勉強の事への心配は、かなり減った。もちろん、多少の心配はあるが、なるべく前の学校に合わせようと努力してくれた事、そして僕とたくさん話してくれたこと、それに僕は感謝してもしきれない。勉強にあまり積極的でない僕に、あきらめず教えてくれた。

この入院で、僕が学んだこと、それは一人じゃ何もできないということ。僕は昔、こんなことを聞いた。「人という字は人と人が支えあってできているのだ。」と。その時はわけがわからなかったが、今になってそれは99%わかった気がする。だが、残りの1%はわかっていない。そして、それを知るのもっと経験を吸収した後だろう。そして支えられた自分は、だれかを支えるのだ。そんなことを気にかけてくれた分校の先生、友達、看護師さんたち、

「ありがとう。」

